

平成 28 年度 長野県埋蔵文化財センター出土品展

掘るしん in しなのい 2017

遺跡調査報告会・トークセッション

次第

10:30 開会

10:35 遺跡調査報告会「信州の縄文遺跡発掘速報」

- ① 栄村ひんご遺跡 10:35～11:05 谷 和隆（長野県埋蔵文化財センター）
- ② 朝日村山鳥場遺跡 11:05～11:35 廣田和穂（長野県埋蔵文化財センター）
- ③ 飯田市川原遺跡 11:35～12:05 黒岩 隆（長野県埋蔵文化財センター）

13:30 トークセッション「信越地域の縄文文化」

- ① 基調講演「北信濃の縄文文化」 13:30～14:00
綿田弘実（長野県埋蔵文化財センター）
- ② トークセッション「信越地域の縄文文化」 14:00～15:00
パネリスト：寺崎裕助氏（新潟県考古学会長）
寺内隆夫氏（長野県立歴史館）
綿田弘実（長野県埋蔵文化財センター）

15:00 閉会

2017（平成29）年2月18日（土）

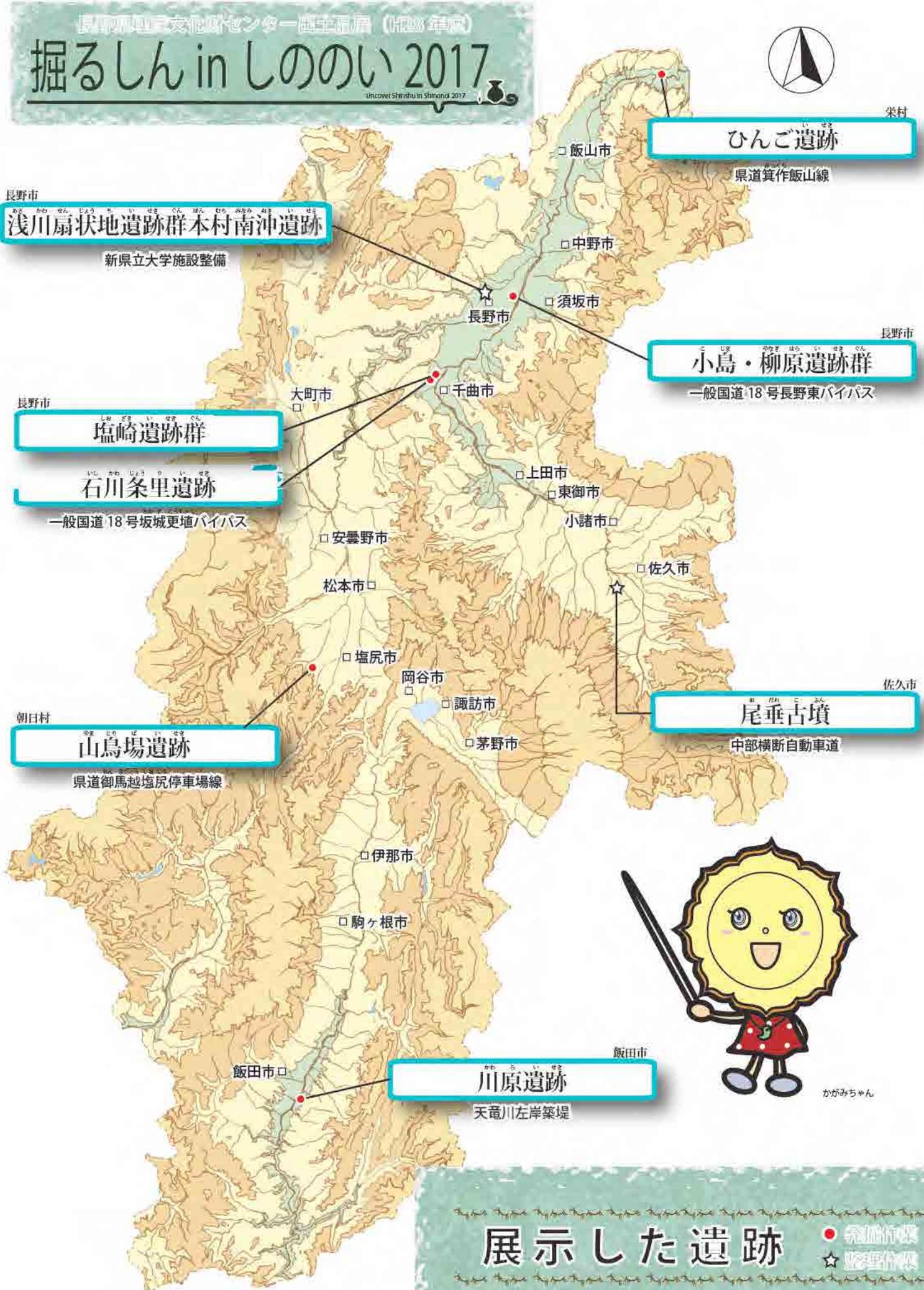
会場 JAグリーン長野 グリーンパレス

主催 長野県埋蔵文化財センター

後援 長野県教育委員会

掘るしん in しなののい 2017

Uncover Shinshu in Shinohara 2017



かがみちゃん

展示した遺跡

● 発掘作業 (Excavation work)
 ☆ 整理作業 (Arrangement work)

いせき ひんご遺跡

— 県道箕作飯山線関連 —

所在地及び交通案内：下水内郡栄村豊栄 2198

JR平滝駅より国道117号線を西へ約300m
先左折。フランセーズ悠さかえ前。

遺跡の立地環境：千曲川左岸低段丘南端の標
高約285m地点に位置する。

発掘期間：28.6.1～10.5

調査面積：517 m²



図1 ひんご遺跡の位置(1:50,000 苗場山)

千曲川右岸の縄文のムラ

遺跡は河岸段丘上の微高地に位置し、千曲川沿いの東西方向に細長く約110mにおよびます。遺構数は昨年度調査との合計で、敷石住居跡5軒、竪穴住居跡23軒、土坑410基、配石遺構5基、土器集中35か所、炭化物・焼土集中34か所、粘土採掘坑・貯蔵穴・配石墓・溝跡各1基です。

出土した縄文土器は、早期の押型文土器・絡条体圧痕文土器から後期加曾利B1式にわたり、後期前半、特に堀之内2式期に属する土器が最も多く、これに次ぐのが火焰型土器に代表される中期中葉から後葉初めの土器群です。昨年度調査では、この時期の土器は少量で、後葉の沖ノ原式期の土器が多量に出土しました。

縄文時代中期の遺構・遺物

中期中葉から後葉初めの土器は、調査区西側部分南半の斜面から多量に出土しました。土器量の多さに対して、その時期に属することが確認できた遺構は、後期の遺構に壊されたためか、貯蔵穴1基のみでした。調査区西端付近の斜面にあり、規模は東西約1.7mの円形、断面はフラスコ形で、埋土下半部から王冠型土器の破片が出土しています。

土器群の主体を、火焰型・王冠型土器など新潟県を中心に分布する馬高式土器が占め、東北地方



図2 土器出土状況

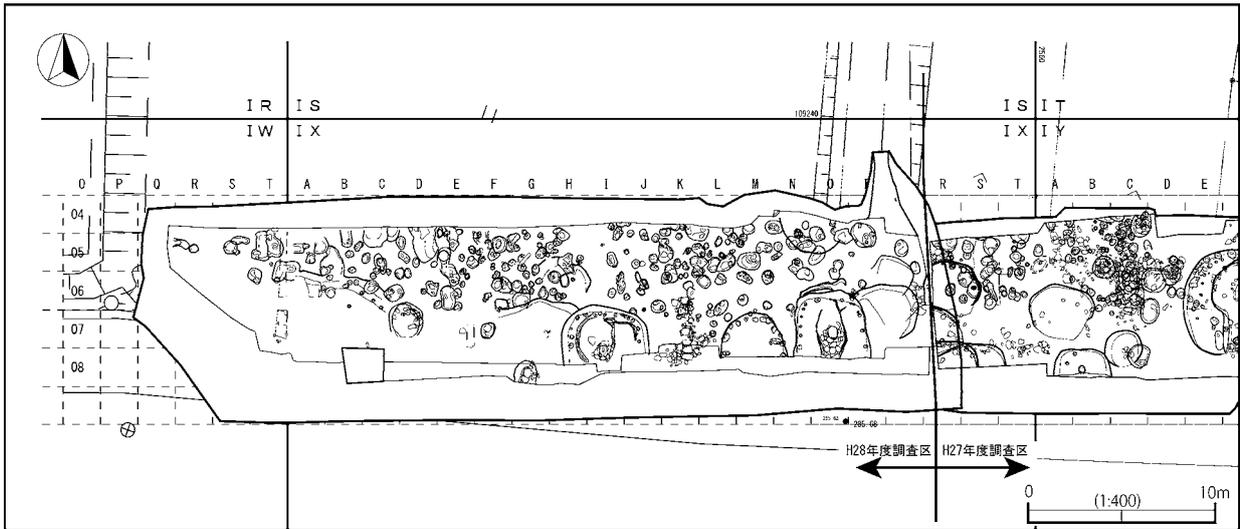


図 3 平成 28 年度調査区全体図

の土器である大木 8a・b 式土器もみられます。長野県に多い焼町土器などはきわめて少量でした。

中期後葉の沖ノ原 I・II 式期の遺構には、複式炉の可能性のある石組みを伴う埋設土器 1 基と、逆位の埋設土器 1 基が検出されました。

縄文時代後期の遺構・遺物

主体部が推定できる住居跡には、竪穴住居跡 SB27・28 と、敷石住居跡 SB24・26 があります。

SB28 (図 4) は主体部は隅丸方形で、東西の大きさは 4.6m です。床面の周囲には柱穴が巡り、その内側に幅 10~20 cm、深さ 5 cm ほどの小溝がみられます。中央付近には方形の石囲炉があり、炉石は扁平礫を平らに設置しています。炉内には多数の土器片を敷きつめ、多量の炭・焼土・灰が残っていました。



図 4 竪穴住居跡 SB28 (南から)

SB27 は主体部が円形と推定され、壁柱穴が巡っています。

SB26 (図 5) は主体部が隅丸方形、東西 4.1m を測ります。SB28 と同様に壁柱穴が巡り、多量の炭・焼土が残る土器片敷き石囲炉があります。奥壁から炉を挟んで小溝があり、炉から出入口部分には敷石があります。SB26~28 は堀之内 1 式期に属するものと考えられます。

SB24(図 6)は奥壁から張出部まで検出し、長軸 5.4mを測ります。平面形は不明確で、柱穴は確認できませんでした。扁平礫を立てて埋置した方形石囲炉に埋設土器があります。炉の周囲から張出部に敷石があり、先端部に立石があります。時期は堀之内 2 式期です。

このほかにも三十稲場式と堀之内 1 式期の炉埋設土器、住居奥壁の残存部と推定される掘込みなどを検出しました。

後期前半の土器は、諸段階に縄文を多用した土器と三十稲場式土器、次いで新潟県に多い南三十稲場式古段階がみられます。また堀之内 2 式土器と南三十稲場式新段階の土器に石神類型とされる土器が伴います。加曾利 B1 式は少量でした。堀之内 2 式期前後には、きわめて軽量で白色を呈する見慣れない土器があり、分布範囲を追及する必要があります。

石器では磨石・凹石が比較的多いものの、特定の器種に片寄らない組成のようです。剥片石器の素材は地元産の無斑晶質安山岩が圧倒的に多く、チャート・黒曜石はきわめて少量です。多量の剥片・碎片類に対して、道具の出土は少数の感があります。

土坑群と墓跡、炭化物の集中

調査区の北半部、微高地の平坦面では多数の土坑を検出しました。直径 50~100 cm 前後の土坑の中に、木柱の根固めと思われる礫を埋置したものが含まれ、多角形、長方形に配置する部分もありまし



図 5 敷石住居跡 SB26 (南から)



図 6 敷石住居跡 SB24 (南から)



図 7 掘立柱建物跡 (東から)

た(図7)。規模・形状から柱穴と推定される土坑が多いため、掘立柱建物群が広がるものと考えられます。

墓跡と推定される土坑は少数で、配石墓1基を検出しました(図8)。南端は調査区外にあり、長軸100cm以上、短軸73cmの楕円形に扁平円礫を立てて埋置し、囲みの中に大形礫を平らに置いています。北端の棒状礫は立石であろうと思われます。墓穴北端から、堀之内2式の小形浅鉢が逆位で出土しました。



図8 配石墓(北から)

遺物包含層には、全体に多くの炭化物が含まれていましたが、炭化物や焼土が集中する部分と、土器が集中する部分が多くみられました。炭化物の中には、形状を留め、クリの種実が集中する箇所がありました。

信越国境の縄文時代中・後期集落

本遺跡の集落としての継続時期は、縄文時代中期の馬高式期から後期の加曾利B1式期が主となります。この間の土器様相は、中期中葉はほぼ新潟県の馬高式が占め、後葉前半は信越に分布する栃倉式、後葉後半は沖ノ原式を主体に、長野県経由の加曾利E式が従属するという状況です。後期前半は信越両地方の土器が共存し、地域色ある土器も生じています。遺構については、新潟県ではまれな敷石住居と、長野県では少数の掘立柱建物が併存していた可能性が考えられます。

埋蔵文化財の調査が少なかった地域で、初めての成果とともに、多くの研究課題がわかりました。

やまとりばいせき 山鳥場遺跡

— 県道御馬越塩尻停車場線関連 —

所在地及び交通案内：東筑摩郡朝日村朝日村西洗馬
1448-1 ほか

朝日村役場より東へ約 1.6 km。県道 292 号から 298 号を経てスタービレッジ東側。

遺跡の立地環境：鎖川右岸段丘上、内山沢の形成した扇状地先端部に位置する。標高約 780m。

発掘期間：28. 7. 1～11. 30

調査面積：1,400 m²

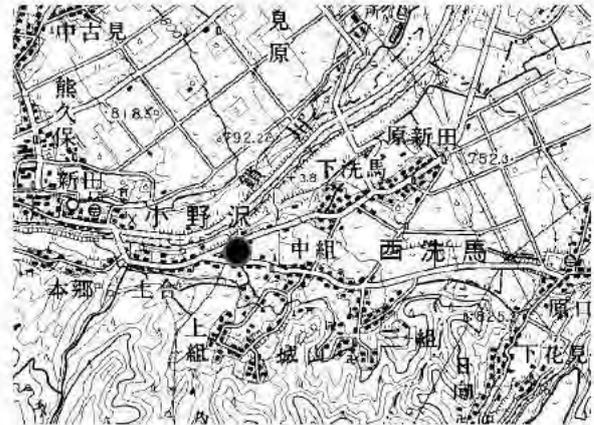


図1 山鳥場遺跡の位置 (1:50000)

松本盆地南西部の縄文集落

今年度は県道 298 号と村道西 46 号に挟まれた地点の調査を行いました (図 2)。調査区は西側の①区と東側の②区の 2 つの地区に分けて調査にあたりました。①区では遺構は検出されませんでした。調査区の約 2/3 にあたる東側の②区で縄文時代中期後葉・後期・晩期の生活痕跡を確認しました。



図2 調査範囲

縄文時代中期後葉

竪穴住居跡 8 軒、土坑約 80 基、大量の土器片のほかに土偶、石器等が出土しています。当該期の遺構は②区全面に分布していますが、遺構数や遺構密集度は②区西端から東端に向けて高くなる傾向が認められ、また基盤層が②区西端から①区に向けて低く傾斜することが確認されていることから、当該期の集落域の西端が①・②区境付近となる可能性が考えられます。一方、調査区東端は遺構が密集しており、次年度調査区の東方に向けて集落域がさらに広がるのが想像されます。



図3 竪穴住居形状 a (不正形)



図4 竪穴住居形状 b (プランが五角形)

また住居跡間の切り合い関係や住居跡出土土器型式からみて、当該期において数段階の集落変遷となる可能性が考えられます(図7)。堅穴住居跡の形状と規模は、a：プランが不整形形状で長軸が5.7~6m(図3)。b：プランが5角形状で長軸が4~5m、の2者に分かれます(図4)。

この形状は同村で調査された熊久保遺跡でも確認でき、中期後葉の間にa形態からb形態に変遷することが判明しています(注1)。本遺跡でも同様の変遷をたどるか、今後の検討課題です。

住居跡内の炉はいずれも石囲炉で、長方形と不整形のものがあります。炉内埋土は住居跡埋土に類似し、炭化物・灰などの堆積は基本的に認められません。さらに炉石の一部が意図的に抜かれたと推測される例も認められたことから、炉の廃絶に関する一定の手順が存在した可能性が考えられます。

土坑は約80基検出しました。平面形状は円形~不整形で、直径30~50cm程度のものが多く、②区中央~東部に分布しますが、切り合うほど密集せず、集落域内の土坑数としては少ないといった印象です。同様の傾向は熊久保遺跡の集落域でも確認されています(注1)。遺構の諸属性や分布の傾向については、松本平における当該期の調査成果を踏まえて検討してゆきたいと考えています。

当該期の土器については、キャリパー形口縁部に褶曲文を施す個体や、口縁部が直線的に外反し、円筒形の胴部を有する個体を含む一群と、唐草文や腕骨文を施文し、器形に樽型土器を含む一群の二者が認められ、当地の編年における中期後葉I~II期の所産と推測されます。7号住居跡では、縄文を地文とし、沈線で口縁部に連弧文、胴部に剣先文と渦巻文を施す土器も出土しました(図5)。他地域の影響を受けた文様の可能性が考えられます。

土偶は胴部と足部の2点が出土しました。胴部に沈線で渦巻文や剣先状の文様が施されるのは、当該期の松本平で出土する土偶に共通する特徴です(図6)。類例は松本市葦原遺跡に認められます。

石器は石鏃、石匙、凹石、石皿、打製石斧、磨製石斧等



図5 他地域の影響を受けた文様を有する土器



図6 土偶(中期後葉)

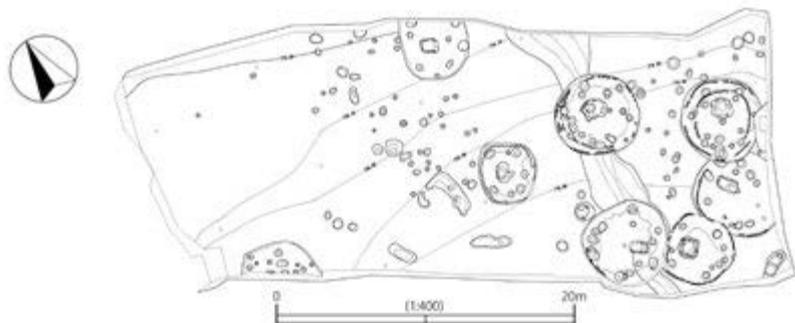


図7 ②区 縄文時代中期の遺構配置図

が出土しました。特に石鏃は非常に少なく、調査区内で数点しか出土していません。松本平西南山麓における当該期の遺跡では、石器の組成中で石鏃の占める割合が少ない点が指摘されています（注1）。本遺跡でも同様の傾向が認められました。

縄文時代後期

②区南西部の調査区境で、2軒の住居跡を検出しました。3号住居跡は、床面の一部に平石が並んで出土していることから、敷石住居の一部と推定されます。炉は長方形の石囲炉で炉体土器を伴っています。また本住居跡を囲む様に複数の土坑が検出されていることから、位置的に本住居跡に伴う柱穴と推測されます。

当該期の遺物は調査区外南方からの押し出しと推測される土混礫中より集中出土しており、調査区外南方に集落域が広がると推測されます。

縄文時代晩期

②区南西部の調査区境では耳飾りや若干の土器片が出土しました。遺構は検出されていませんが、遺物の分布範囲は後期と同様であることから、調査区外の南方に当該期の遺構が存在する可能性が高いものと考えられます。

耳飾りは有文2点、無文2点が出土しています。有文の1点は、直径3cm、厚さ1.5cmを測ります。表面には雲形に類似した文様が施され（図8）、裏面は中央が薄い「ブリッジ」状で、中心には小さな穿孔があります。

注1：朝日村教委2003『熊久保遺跡10次発掘調査報告書』



図8 耳飾り



図9 検出された竪穴住居跡群（中期後葉）

かわらいせき 川原遺跡

—天竜川左岸築堤関連—

所在地及び交通案内：飯田市下久堅知久平
中央自動車道飯田 IC から東へ約 7.0 km。

遺跡の立地環境：天竜川左岸の低位段丘面上に位置する。

発掘期間：28. 8. 24～12. 22

調査面積：1,705 m²



図1 川原遺跡の位置 (1:50,000)

天竜川左岸の微高地上に営まれた 縄文時代中・後・晩期のムラ

天竜川左岸の築堤護岸工事に伴い発掘調査された川原遺跡は、西側を流れる天竜川との標高差が4mほどの低い微高地上に位置しています(図1)。今回の調査範囲は遺跡の北西端にあたります。

調査範囲全体を地形の変化する場所で北から1～3区に分け、遺構・遺物の確認を行いました。調査区両端部の1、3区は近世以降の天竜川起源の洪水砂が厚く堆積し、遺構、遺物はありませんでした。2区は、東側から延びる狭い微高地上に、縄文時代中期



図2 天竜川によって両側を削られた微高地上に残る
縄文時代の集落跡 (上方が天竜川)

後半から晩期初めの竪穴住居跡等 10 軒と土坑が発見されました(図 2、3)。

遺構で竪穴住居跡としたものは、形状は不整形円形、長楕円形、隅丸長方形と様々で、大きさも長軸 3m 未満から 4m を超えるものもあります。床面は貼床がなくやや固い状態で、炉跡はないか、あっても焼土等が明確に確認されませんでした。出土遺物は全体的に少なく、床面やや上層からの出土が多くみられます。なかには、床面およびやや上層と柱穴から出土の土器が同一のものと確認された例もありました。

調査では住居跡としましたが、竪穴建物跡の一類型として、作業場や短期間および季節的な居住の場としての機能も考えられます。

各遺構から出土した縄文土器は各時期にわたりますが、破片のみで、石器は礫石器、剥片石器が出土しています。とくに、石錘、横刃型石器、打製石斧が目立ちます。さらに、各遺構から石器製作段階がわかる資料も出土している点は興味深いです。

昭和 44・45、56 年に調査が行われた今回の調査範囲の東側では、弥生時代の住居跡が確認されていますが、今回、その西側で縄文時代の集落跡がみつかりました。遺構は重なりあい、縄文人は断続的にこの地を訪れています。天竜川沿いの低位微高地の居住集落域としての土地利用が、縄文時代にまで遡るといふ新しい視点が加わりました。

集落の性格等については、今後、整理作業のなかで解明していく予定です。

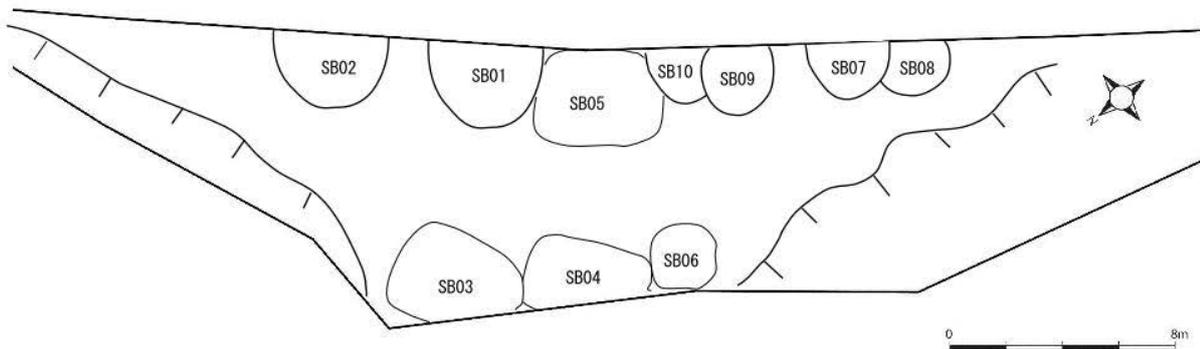


図 3 全体図と住居跡等配置概略図

基調講演 北信濃の縄文文化

— 中期後半から後期前半を中心に —

長野県埋蔵文化財センター 綿田弘実

北信地域

長野県北東部を流れる千曲川流域は、上流域の上田・佐久盆地を中心とする東信と、中・下流域に位置し長野・飯山盆地を中心とする北信に区分される。北信地域の東は河東山地の火山群を隔てて群馬県吾妻郡に接し、北は北信五岳と称される北部山地から新潟県中頸城郡（妙高市、上越市）に至る。西は犀川丘陵と、聖山を主峰とする西部山地を介して、松本盆地北部に通ずる。三方を画された平野部には、東信を北西流した千曲川が東北に向きをかえ、長野盆地の方向に走り犀川と合流する。さらに下流域の深雪地帯飯山盆地を流れ、市川谷の峡谷を抜けて新潟県中魚沼郡津南町に達し、信濃川と名を変える。

縄文時代遺跡数の推移

『長野県史考古資料編』には、時期不明 2141 遺跡を含めて 7970 遺跡が記載され、北信地域は 981 遺跡を数え県内の約 12% を占める。時期別の推移は、北・東・中・南信 4 地域いずれも中期を頂点とする山形の曲線を描く。前期から中期への増加率は県内平均 3.16 で、南信 5.11 に対し北信は 1.58。中期から後期への減少率は県内平均 0.29、南信 0.23 に対し北信は 0.34 となる。北信地域の遺跡数推移の特徴は前期から中期への増加は 4 地域で最も緩やかであり、後期への減少も少なく、南信地域と対極的な変動を示している。

中・後期土器と住居・集落の変遷

① 中期中葉から後葉初頭 この時期は北信地方で調査事例が少なく、土器も集落も不明な部分が多い。環状集落を検出した中野市千田遺跡から様相をうかがってみる。勝坂式並行期には曲隆線文土器と呼ばれる貼付隆帯の周囲に半隆起線を充填する土器と焼町土器を主体に、火焰型土器の仲間、東北系、北陸系の土器が見られる。住居は中期前葉から引き続き、円形竪穴の中央に地床炉や埋甕炉を設けるもので、石囲炉は知られていない。

② 中期後葉 長野盆地以北では、東北地方南部から新潟県に分布する大木 8 b 式土器が伝わり、続いて突起と隆帯装飾が発達した栃倉式土器に移り変わる。北信から上越では、大形・平口縁部の圧痕隆帯文土器が伴う。竪穴住居には壁際が一段高いベッド状遺構が巡り、掘り込みが浅いコ字形炉・長方形炉を備えたものとなる。関東地方南西部から中・南信地方で流行した住居出入口部に土

器を埋める埋甕の風習は見られない。栃倉式土器が終息に近づき、加曾利 E 式系土器と中・南信地方に分布する唐草文系土器がとってかわる頃、竪穴住居にはベッド状遺構がなくなり、掘り込みが深い方形石囲炉となる。

③中期末葉 関東地方に分布する加曾利 EⅢ式土器の伝播とともに遺跡が急増し、東北地方を故地とする大木 9 式系土器、在地の圧痕隆帯文土器の主流 3 系統がほぼ等量を占め、唐草文系土器が少量見られる。大木式系は変容し始め、少数類の多連渦巻文土器、大波状口縁土器などが伴う。北陸地方の串田新式土器も見られる。竪穴住居は 4 枚の礫を埋置した方形石囲炉を備えたものとなり、埋甕が普遍的に見られる。加曾利 EⅢ式新段階には大木系土器は終息を迎え、加曾利 E 式系の占有率が增加する頃、炉辺や埋甕周囲に石を敷いた敷石住居が出現する。中期終末に加曾利 EⅣ式土器が主体となる頃、敷石住居の張出部が長く発達して柄鏡形と呼ばれる形態が現れ、複数の埋甕を設けた住居が見られる。

④後期初頭 関東地方南部に現れた称名寺式土器は、古い段階には伝わらず、加曾利 E 式系が変化した土器が多く見られる。中頃以降称名寺式土器が現れ、後期・晩期に土器組成の主体を占める無文土器が増加する。新しい段階には、新潟県に主体的に分布する三十稲場式が、中野市あたりまで散見される。中期末葉より遺跡が減少し、集落の様相は明らかではないが、敷石住居は普遍的に見られるようになる。

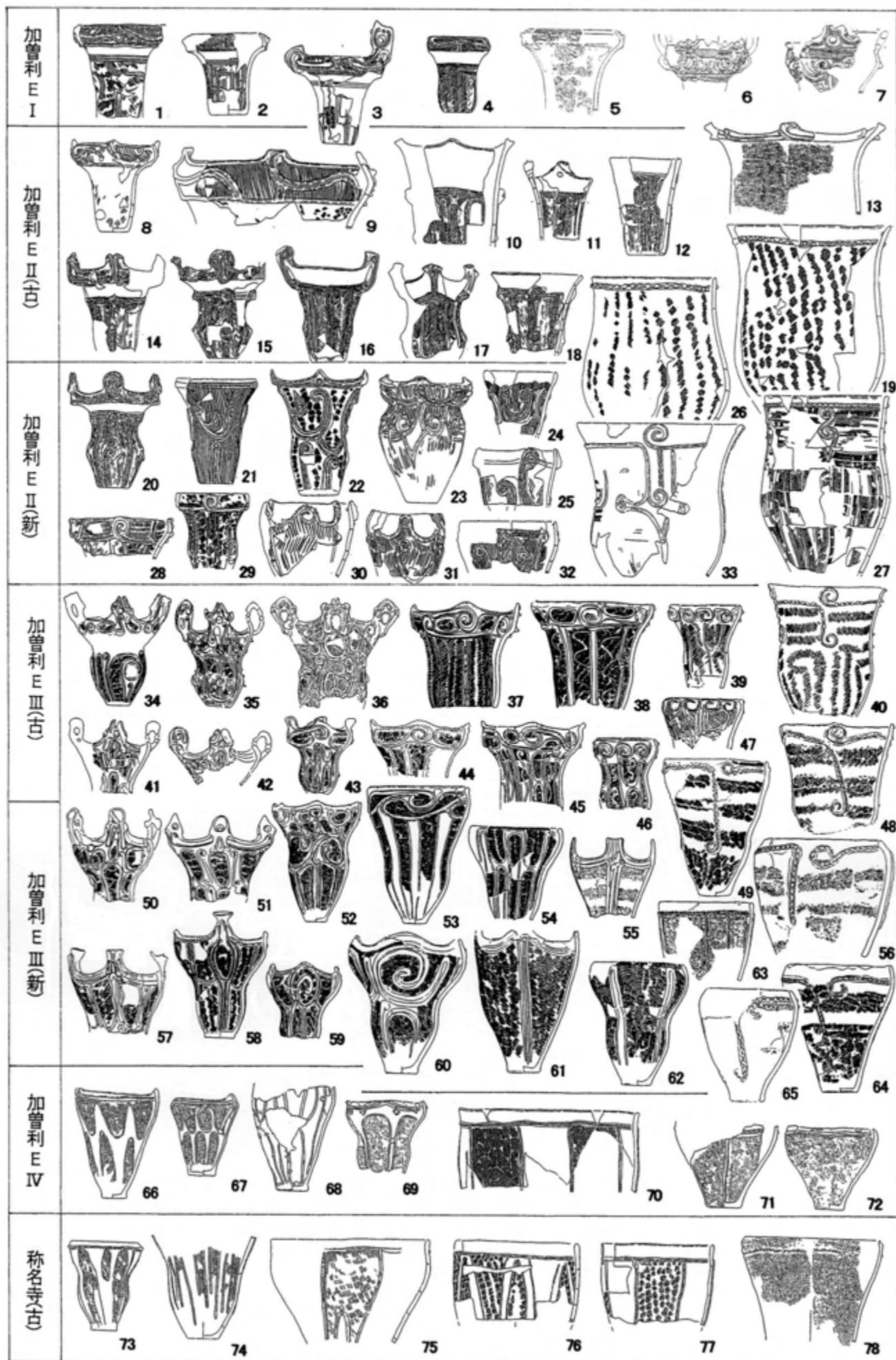
⑤後期前葉 堀之内 1 式期には長野県全域で、深鉢形土器に代わって丈が低い鉢形土器が盛行し、地域色を示す。この時期には、新潟県に現れた南三十稲場式と似た深鉢形土器が長野県にも広がり、鉢形土器とともに用いられる。鉢形土器は堀之内 2 式期にも継続し、関東地方から伝わった深鉢形土器と共存する。後期前葉を通じて、長野県に特徴的な鉢形土器は、遺体の頭部に土器をかぶせた甕被葬に用いられる。鉢形土器は新潟県にも広がり、長野県に近い地域には甕被葬も見られる。堀之内 2 式期には、周囲に多量の礫をめぐらせたり、張出部から隣接住居まで列石が連ねた敷石住居で構成された集落が見られる。墓穴の上面に石を置いた配石墓や、側壁を石で囲んだり、底面に石を敷いた石棺墓が出現し、これらを交えた配石遺構が盛行する。

⑥後期中葉 装飾がある土器は関東地方から伝わった加曾利 B1 式に占められ、地域色が薄まる感がある。この時期を最後に、長野県では敷石住居は終息するようである。遺跡の減少とともに住居跡を検出した集落調査例も乏しい。

千曲川沿岸の大規模集落

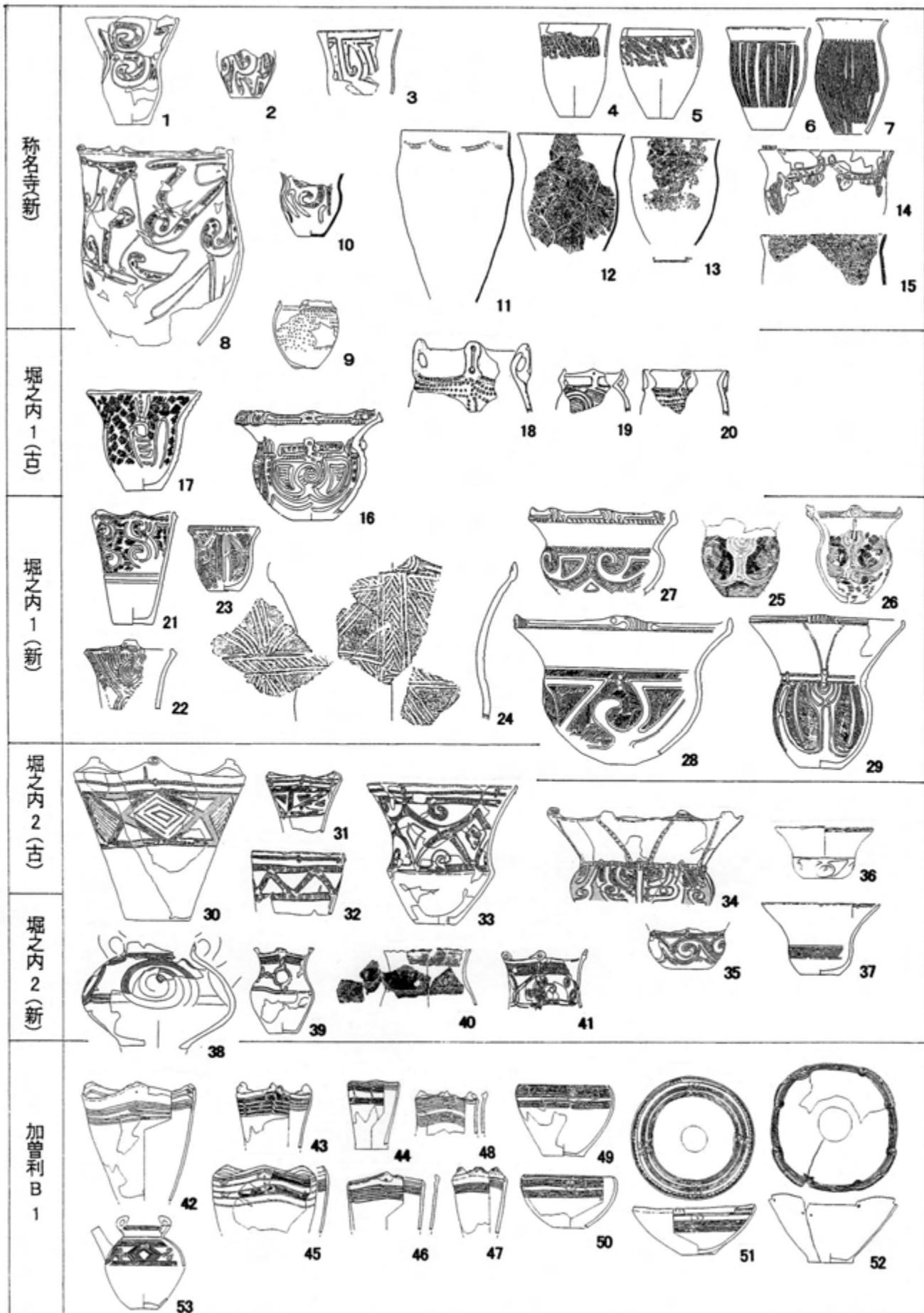
千曲川本流に面した千田遺跡 8 区は、上記①以前から③期前半までの環状集落で、豊富な石材を利用した石器製作集落の側面をもつ。千曲市屋代遺跡群の③期集落では、多数の掘立柱建物跡から魚骨が検出され、盛んなサケマス漁労が証明された。北信地域では千曲川本流と密着した地点に、拠点集落が展開している。山と森の恵みに加えて、千曲川という大河の資源が、遺跡数の変動が少ない北信地域の縄文文化を支えた背景にあらう。

長野県北信地方における縄文時代中期後半土器の変遷



1~27: 中野市千田遺跡、34~72: 千曲市屋代遺跡群、73~75: 千曲市円光房遺跡、76~78: 高山村八幡添遺跡

長野県北信地方における縄文時代後期前半土器の変遷



1・2・8・9: 中野市柳沢遺跡、3~7・22・27~29・37: 中野市栗林遺跡、10~15: 長野市下中牧遺跡、16: 長野市宮遺跡、17~21・24: 山ノ内町伊勢宮遺跡、23: 飯山市東原遺跡、25・26・36: 中野市千田遺跡、30~32・34・35: 長野市村東山手遺跡、33・38~41: 高山村湯倉洞窟遺跡、*42~53: 安曇野市北村遺跡

トークセッション 信越地域の縄文文化

1. 姿をあらわした信越境の縄文遺跡
2. 信越地域の縄文土器、その特徴と変遷
3. 土器からみた信越地域の交流関係
4. 縄文ひんごムラの住人をさぐる
5. なぜ、千曲川に接して大きなムラが営まれたのか
6. まとめ